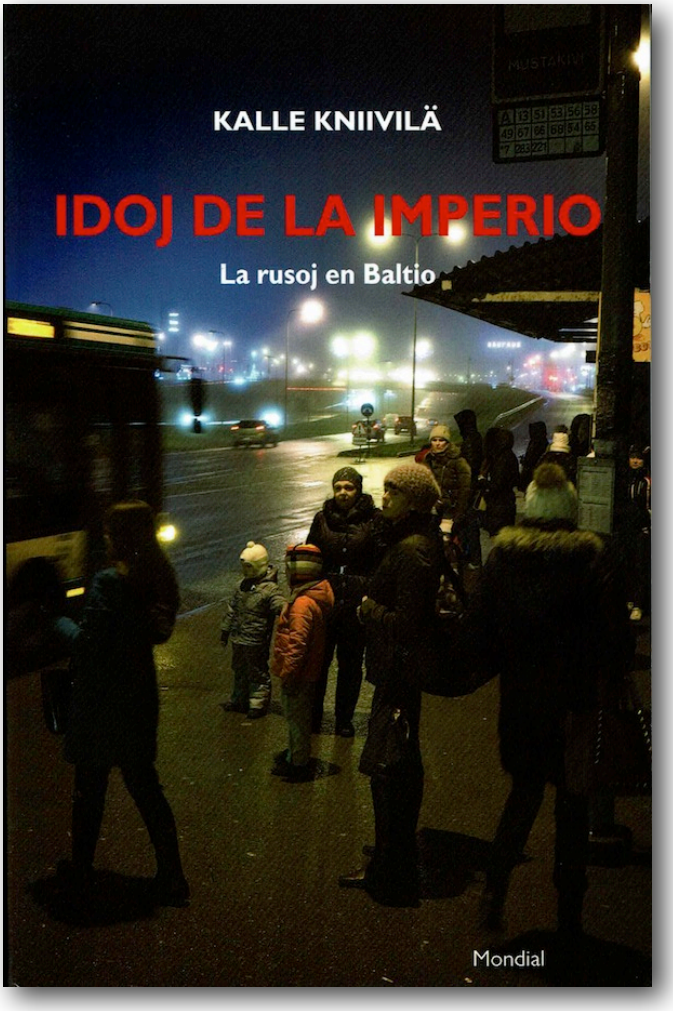
Idoj de la imperio — La rusoj en Baltio

verkita de Kalle Knivilä
eldonita de Mondial, 2016
185 paĝoj



1989年のベルリンの壁の崩壊とそれに続く1991年のソ連の解体は私にとって衝撃的な大事件だった。その引き金となったのが、エストニア、ラトヴィア、リトアニアのいわゆるバルト三国の独立運動で、当時、三国の市民の連帯の表現としての「人間の鎖」の報道に大いに感動したものである。あれから早くも四半世紀が過ぎたが、本書はその後の三国の状況について多くの情報を伝えてくれる。著者は、そこに居住するロシア人へのインタビューを通じて、「帝国」崩壊後の彼らの暮らしぶり、彼らの置かれた立場への意見などを聞き出そうと努め、相手は自らの過去を振り返り、将来への思いを語る。私はその問答を読みながら、彼らが経てきた人生に思いを馳せて感無量であった。

インタビューは2015年の夏から秋に行われ、相手はジャーナリスト、政治家、労働者、失業者、学生などさまざまである。著者はフィンランドのジャーナリストで、エスペランチストでもあり、すでに著書を２冊（Homoj de Putin、Krimeo estas nia）刊行している（それぞれ本誌（ La Movado ）に書評が掲載されている。前者は2014年11月号、後者は2015年9月号）。

ナショナリズムが昂進するなかで、エストニア、ラトヴィアは、1940年６月のソ連への編入（それはエストニア人たちから見れば「占領」以外のなにもの

でもない）以前に居住していた市民とその子孫のみに国籍を付与することを決定した（リトアニアだけは自動的に国籍を認めた）。それは、「占領」以後にソ連各地から流入してきたロシア人（必ずしもロシア人ばかりではない。正確にはロシア語系住民あるいはロシア語話者住民）を排除するためであり、国籍を取得しようとする者は厳しい言語能力試験に合格せねばならなかった。この決定は残留ロシア人から猛烈な反発を招いたほか、のちに三国が加盟を目指していたEUや国際人権機関からも批判された。

ロシア人には高等教育を受け、行政機構や企業で高い地位を占めていたエリートもいたが、生活のためにソ連の他の地域から流入して国営企業や原子力発電所などで働いていた労働者やその子弟もいた。その彼らが、独立後いきなり「占領者」と名指しされて国民統合から排除されたのである。その後、国籍取得に関する要件は次第に緩和され、ロシア人を統合してゆく方向にあるが、依然として無国籍のロシア人が存在していて（ラトヴィアでは人口の14％）、社会問題となっている。

本書を読むうちに、歴史認識が現状と直結することを思い知らされる。立場によって歴史的事実の見方は全く異なる。例えば、2007年にタリン（エストニア）で「ブロンズの夜」と呼ばれる事件が発生した。これはソ連赤軍によるファシズムへの勝利を記念して1947年に立てられた「ブロンズの兵士」の像を、ときの政権が「占領」のシンボルとみなして撤去を決めたことにロシア人が反発して暴動となった事件である。歴史認識が現状認識と鋭くリンクし、政治的対立に直結するのである。

さらに、情報格差の問題がある。著者は、ナルヴァ、ラスナマエ（ともにエストニア）、ヴィサギナス（リトアニア）など、ロシア人が人口の過半を占める都市を訪れる。そこでは、特に高齢者は、ロシア語だけで生活し、国家語を全く知らず、非ロシア人との交流もない。その上にロシアで制作されたテレビ番組ばかり見ていれば、彼らの社会認識はきわめて偏頗なものにならざるを得ない（もっとも、最近はロシア人に向けたロシア語放送の重要性が認識されつつあるようだが）。他方で、若い世代はもっと開放的であり、ロシア語に加え、それぞれの国家語を流暢に話す。しかし、国家語の通用範囲は国内に限られ、労働市場も狭小であり、ロシア人というだけで就職に不利である。そこで、英語かロシア語が話せたほうがEUやロシア語圏内での就職に有利だとしてイギリスなどへ留学する者も増えている。

その他にも、本書には極めて多くの情報が盛り込まれている。2014年のクリミア危機がロシア人の存在を改めてクローズアップしたこと（「第五列」！）、2015年の難民問題の発生の際、EUによる難民の割当に対して、ロシア人の間でも反発が生じたことなど、最新のトピックスにも言及されてい

る。本書は、明快なエスペラントを駆使し、異文化との共存、コミュニケーションをめぐってヨーロッパの周縁で進行している事態を伝えると同時に、われわれ自身の問題を考えるにあたっての示唆も与えてくれる。

（La Movado 2016年10月号掲載。なお、転載にあたって一部表現を改めた。）

（追記）
１　本文中で言及したKrimeo estas niaについてLa Movadoに掲載された書評は、伊藤俊彦「読書日記2015〜」に収録されている。
２　書評を書くにあたり、バルト三国の歴史をめぐる文献を何冊か読んだが、そのうちで最も感銘を受けたのは、橋本伸也『記憶の政治 ― ヨーロッパの歴史認識紛争』（岩波書店、2016）であった。本書は、バルト三国における歴史の記憶と政治との関わりをめぐり、日本の現状をも深く意識しつつ議論が展開されていて、読んでいて興奮させられた。加害の歴史が疑う余地もなく明らかになる一方で、それをなかったことにしたい勢力の抵抗もまた激化している現在、Idoj de la imperioとあわせて反復熟読してみたい。